



平和と和解を築く人 宣教女シスター マリア・トロンカッティ

シート 5

Sr.マリア・トロンカッティ: 平和と和解の築き手

「1960年代末、土地の所有をめぐる開拓者とシュアル族という二つの民族の間の緊張が激化し、敵意の雰囲気再び高まってきました。1969年7月4日、一部の開拓者たちは、サレジオ会の宣教所に火を放ちました。彼らは、サレジオ会員たちがシュアル族の側に立ち、彼らの尊厳を擁護していると考えたからです。Sr.マリアはこの出来事に大変心を痛め、さらなる災いの始まりになるのではないかと恐れました。その時、母の心から生まれたひらめきとして、彼女は、自分の愛するこの二つの民の和解のために、神に自らを犠牲として捧げることを思いついたのです。イエスと自分をこれほど深く一致させる手段は、他には見出せませんでした——『友のために命を捧げること、これにまさる愛はない』(ヨハネ 15 章 13 節)。Sr.マリアは、その説得力とやさしさの力によって、芽生えつつあった復讐の動きを食い止め、平和と赦しの使者として人々に耳を傾けさせることに成功しました」(チルコラーレ 1046 号より)。



神の言葉

「平和を実現する人々は、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる。」

(マタイによる福音書 5 章 9 節)

「できれば、せめてあなたがたは、すべての人と平和に暮らさない。」(ローマの教会への手紙 12 章 18 節)

「わたしは、平和をあなたがたに残し、わたしの平和を与える。それは、世が与えるように与えるのではない。心を騒がせるな。おびえるな。」(ヨハネによる福音書 14 章 27 節)

「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。」(ヨハネによる福音書 15 章 13 節)



Video: ペドロ・ガブリエッリへのインタビュー <https://youtu.be/e00NAUUm2vY>



Sr. マリア・トロンカッティの伝記より

平和と和解のために命をささげること

「Sr.マリアは、自分をささげたいと思っていました。それは自分にとって義務であるように感じられたのです。それも、他のすべての義務と同じように、ただの単純な義務であり、主が彼女にお望みになる他のすべてのことと同様のものでした。彼女のことを、私たちはもう理解しています。彼女は『体裁のよいジェスチャー』のために動くような人ではありませんでした。ただ、彼女は、その土地で次々と犠牲者が積み重なっていくという考えに耐えることができなかったのです。彼女は、一人の犠牲者だけで憎しみを消すことができると確信していました。とりわけ、その一人が『橋となる人』——まさに彼女自身のように、キヴァリたちと開拓者たちの双方から母として認められているような人であれば、なおさらです。」

彼女は、槍とカービン銃で武装したキヴァリの代表団からこう言われるのを聞きました。

「もし誰かがサレジオ会の神父たちに、ほんの引っかき傷ひとつでも負わせたら、私たちは白人たちに対して動きます」。Sr.マリアは彼らの言うことを理解していました。誇り高く、同時に激しさを持った歴史が、何世紀、何千年も続いてきたことが、一挙に消えることはない。彼女は知っていたのです。しかし、彼女はまた、主のみ言葉がすべての恐怖を圧倒し、打ち勝つことができることも知っていました。Sr.ピエリーナ・ルスコーニが証言の中で述べているように、彼女は「決定的な調子」で語りかけました。そしてこう言いました。「もし本当に私を愛してくれるなら、あなたたちの武器を私の足もとに置いてください！」と。一瞬の沈黙がありました。そのあと、指導者が仲間に合図を送りました。福音の矢が的に命中したのです。こうしてすべての武器が地面に落ちました。心の武装解除が起こったのです。数ある平和のための出来事の中でも、非常に重要なことがあります。それは、「彼女の心の中で、あの究極の行為が熟していた」ということです。そのことを彼女は、スクアに住むさまざまな人たちにも静かに語っていました。「平和を取り戻すためなら、命さえもささげます」と。壊滅的な衝突が起きる危険は現実には存在していました。Sr.マリアは、誰ひとり区別することなく、すべての人の母であると感じていたのです。ある時、彼女はテレザ・タンカマシュと話す中で、ついこんな嘆きをもらしました。「でも、彼らは私にいったい何を望んでいるのでしょうか。私の心を二つに引き裂きたいのでしょうか？」そして、すでに何度も口にしていた言葉をまた添えました。「もし本当に犠牲が必要なら、主にお願ひしたいのです。私がその犠牲になれますように、と」。

パロミーノ神父は、次のような移行を強調しました。それは、「エントレガ・トタル

(entrega total/全き献身)」から「エントレガ・マルティリアル (entrega martirial/殉教的献身、犠牲としての献身)」への移行です。実際、「エントレガ・トタル」はすべての宣教師、すなわちすべての宣教に携わる者たちに共通するものであり、彼ら・彼女らは皆、自らを完全にささげていました。しかし、「エントレガ・マルティリアル」はSr.マリア・トロスカッティのものでした。彼女はそれを必要なものと見ていただけでなく、それが自分のうちに神の声のように育っていくのを感じていました。それは、主イエスとのさらなる、そして決定的な一致への召命としての声でした。(出典：COLLINO Maria, La grazia di un sì tutto donato, Leumann, Elledici 2012, pp. 442-448)

葬儀にて

白人の家族もキヴァリの家族も、波のように次々とやって来ました。誰であろうと分け隔てなく、みな「お母さーん」と泣きながら悼^{いた}んでいました。そして、特別運行のバスや、時にはトラックに乗ることができたという幸運に恵まれた人たちもいて、マカスからやって来ました。「聖女が亡くなったのだ！」(同書、461 ページ)

キヴァリたちも開拓者たちも皆、その死とその深い意味について自問していることが、非常によくわかりました。というのも、ある時点から、Sr.マリアの言葉や予見、そして嘆願のいくつかが漏れ伝わっていたからです。人々は、赦しの偉大さについて、相手を——自分とは異なる存在であっても——唯一無二の尊厳をもった人間として認めるという友情の深い人間的到達について、そして民族に平和をもたらし得る進歩の光について、思いを巡らせていました。

おそらく、そして「おそらく」ではなく確実に、そういったことを人々はこのような言葉では考えてはいなかったでしょう。しかし、人々の内には、新しい未来への力、願い、突き動かすものが感じられていたのです。

ある男性が、コジモ・コッス修道士にこう言いました。「私は教会に、ミサに、秘跡にまた通い始めます。このすべてが、何かを意味しているのだとわかりました。私は耳の聞こえない者にも、目の見えない者にもなりたくありません…」(同書、463 ページ)

Sr.マリア・トロンカッティの葬儀の日、空に美しい虹が現れました。

「その虹は、人々の心の中にも現れていました」。シュトゥッカ神父は、あの数日間にわたる憎しみ、恐れ、不安に言及しながら、力強いひと言を述べました——「トド・デサパレシオ (Todo desapareció)」。「すべてが消え去った」のです。

そして彼は、同じく力強い言葉をさらに続けました。Sr.マリアの命のささげものが「必要なものだった」と考えたのです。その自発的な献身が必要だった。償いと和解をもたらす犠牲が必要だった。そして、愛の究極の行為が必要だったのです。「スクアの宣教所の火災——と彼は説明します——それはまるで、悪しき者が戦いに勝ったことを示す勝利のように見えました。しかし、Sr.マリアの死は、善が全体の戦争に勝利したことを示すしるしとなったのです」。

実際、「キヴァリと開拓者の間にその日に生まれた理解と平和」は、「今でも続いています」。

そして、シュトゥッカ神父が語る「今」とは、1980年代後半——すなわち20年後の時点であることが記録されています。

これらの証言を裏づけるものとして、さらにいくつかの証言をご紹介します。

ガブリエッリ神父：「スオール・マリアの死後、住民たちは落ち着きを取り戻しました。そのおかげで、私はさまざまな使徒的活動に取り組むことができ、キヴァリも開拓者も、すべての人が協力してくれました」。

Sr.ルス・バルデオン：「福音書には、もっとも大きな愛とは、兄弟のために命をささげることであると記されています。そしてSr.マリアは、無数の慈愛の行い——開拓者であれシュアル族であれ、修道会の姉妹や兄弟であれ、すべての人を助けるために実践してきた行ない——に刻まれた金の印章のように、自らの命をささげました。それは、平穏と平和を得るためでした」。

——そして、まだまだ続けることができるのです。（同書、467～468 ページ）



振り返りのために

1. 私たちが置かれている社会的・文化的な状況の中で、平和を築くうえで直面する課題にはどのようなものがありますか。
2. 異なる考えをもつ人々の間で、対話と傾聴をどのように促進していくことができるでしょうか。
3. Sr.マリア・トロンカッティは、平和と和解のために命をささげました。彼女の模範に倣うために、私／私たちが日々の中でできる小さな行いにはどのようなものがあるでしょうか。
4. 共同体として（教育共同体、若者のグループ、家庭など）、私たちはどのようにして、自分たちの環境の中で平和と和解の証人となることができるでしょうか。



祈りのために

教皇フランシスコの言葉で、世界の平和のために祈りましょう：

私たちはこれまで何度も、何年もかけて、
自分たちの力で、そして武力によってさえも
争いを解決しようとしてきました。
どれほど多くの敵意と暗闇の時があったことでしょう。
どれほど多くの血が流され、どれほど多くの命が絶たれ、
どれほど多くの希望が埋もれてしまったことでしょうか……。

しかし、私たちの努力はむなしいものでした。
今こそ、主よ、あなたが助けてください。
あなたが私たちに平和をお与えください。
あなたが私たちに平和を教えてください。
あなたが私たちを平和へと導いてください。

私たちの目と心を開いてください。
そして「戦争はもう二度といらない！」
「戦争ではすべてが破壊されてしまいます！」という勇気を
私たちに与えてください。

平和を築くために、
具体的な行動をとる勇気を
私たちに吹き込んでください。

アブラハムと預言者たちの神、
愛なる神よ、あなたは私たちを創造され、
兄弟姉妹として生きようと招いておられます。
私たちが日々、平和の職人となる力をお与えください。
私たちが、道で出会うすべての兄弟姉妹を
親しみと善意のまなざしで見ることができるようになしてください。

私たちの市民の叫びに耳を傾ける心を
どうか私たちにお与えください。
彼らは願っています——
私たちが武器を平和の道具へと変えることを。
私たちの恐れを信頼へと、
私たちの緊張を赦しへと変えることを。

希望の炎を私たちのうちに灯し続けてください。
対話と和解を選び取ることができるよう、
そしてそれを忍耐強く貫くことができるように。
ついに平和が勝利をおさめるために。

そして、すべての人の心から、
「分裂」「憎しみ」「戦争」といった言葉が追放されますように！

主よ、私たちの舌と手を武装解除してください。
心と知性を新たにしてください。
私たちが出会うたびに交わす言葉が、
いつも「兄弟姉妹」でありますように。

そして、私たちの生き方のスタイルが
「シャローム(平和)」「ピース」「サラーム(平安)」となりますように。
アーメン。